

『瑜伽師地論』有尋有伺等三地の研究(一)

——十六異論に関する考察——

清 水 海 隆

『瑜伽師地論』(以下『瑜伽論』と略す)はその本地分十七地中の第三・四・五の三地において有尋有伺等三地を説いている。そして、その三地は界施設建立(dhātuprajñāpīvyavasthāna)・相施設建立(laksanaprajñāpīvyavasthāna)・如理作意施設建立(yonīśomanaskāraprajñāpīvyavasthāna)・不如理作意施設建立(ayonīśomanaskāraprajñāpīvyavasthāna)・雜染等起施設建立(saṃkleśaprajñāpīvyavasthāna)の五段に分けられている。この中、第四番目の不如理作意施設建立段においては十六種の異論(sōdāśa parāvāda)が説示されている⁽¹⁾が、本小論はこの十六種の異論について若干の考察を試みようとするものである。なお、この問題に関しては既に宇井伯寿博士が『瑜伽論研究』において漢訳資料を中心とした研究をされ、また神子上恵生教授は十六の中のいくつかについて個別に発表されている。今ここではそれらの研究をふまえて考察を進めていくこととする。

さて、まづ『瑜伽論』がその末尾において「於一切種皆不_レ応_レ理」と述べている十六種の異論について、『瑜伽論』自体の記述を中心としてその内容とそれを主張する人々を示すこととする。

(1) 因中有果論 (Netuphalasad-vāda)

常常時恒恒時於_二諸因中_一具有_二果性_一。謂_二雨衆外道作_二如_レ是計_一。

これは常に因中に果が存在するとする説であり、サーンキヤ学派の雨衆外道(Vātsāganyā)の説であるとされる。この Vātsāganyā に ついて梵文テキストの編者 Bhattacharya は、サーンキヤ学派の Vindhavāsa の学匠であり、この Vindhavāsa が世親と同時代に有力であったことを註に示している。

(2) 從縁顯了論 (Abhivyakti-vāda)

一切諸法性本是有從_二衆縁_一顯_二不_レ從_レ縁生_一。謂_二即因中有果論者及声相論者作_二如_レ是計_一。

諸法の実体は本来的に存在し、それが諸縁を待つて生じてくるとする説で(1)の因中有果論と連続するものである。説者としては因中有果論者すなわちサーンキヤ学派と声相論者(Sabdalksanavādin)が示されている。この声相論者とは声常住論を主張するミーマーンサー学派に比定される。尚、Bhattacharya はこれを文法学派としている。

(3) 去来実有論 (attānāgaradravyasād-vāda)

有_三過去有_三未来 其成就猶如_三現在 実有非_レ仮。……謂如_三經言_一一切有者即十二_レ処此十二_レ処実相是有。又薄伽梵説_レ有過去業。又説_レ有過去去_一有_三未来色_一広説乃至識亦如是。

過去・現在・未来の三世実有を説く論であり、宇井博士は仏教内の説とし經典は阿含經中のものとする。又、Bhattacharya は説一切有部の説としている。なお、この説をヴァーイシニエーシカ学派及び時間論者のものとする説もある。

(4) 計我論 (ātma-vāda)

有_三我薩埵命者生者_一有_三養育者数取趣者_一如_レ是等諦実常住。謂外道等作_三如是計_一。

私の常住を説く論であり、我以下のものは外教の我を分類する十六神我に含まれていることから外教一般の論であることがうかがえる。

(5) 計常論 (śāśvata-vāda)

我及世間皆実常住非_二作所作_一非_二化所化_一。不_レ可損害_一積聚而住

『瑜伽師地論』有尋有伺等三地の研究(一)(清水)

如_二伊師迦_一。謂計_三前際_一説_二一切常者説_二一分常者_一及計_三後際_一説_二有相者説_二無相者説_二非想非非想_一者、復有_レ計_三諸極微是常住_一者。

我と世間の常住を説く説で、六つに分けられている。すなわち一切常住論・一分常住論・有想論・無想論・非想非非想論・極微常住論である。この論はサーンキヤ学派に比定される。

(6) 宿作因論 (pūrvakṛtāhetu-vāda)

凡諸世間所有士夫補特伽羅所受……皆由_レ宿作為_レ因……由_三勤精進吐_二旧業_一故……現在新業由_二不作因之所_レ害故……如_レ是於_レ後不_レ復有_レ漏……由_レ無_レ漏故業_レ尽……由_三業_レ尽_一故苦_レ尽……得_レ証苦辺……謂無繫外道作_三如是計_一。

人の所受の苦は前世の業を原因とし、現在の苦行によつてそれは滅せられ輪廻を脱するとする説で無繫外道すなわちジャイナの説とされている。

(7) 自在等作者論 (īśvarādīkṛtī-vāda)

凡諸世間所有士夫補特伽羅所受彼一切或以_三自在變化_一為_レ因或余丈夫變化為_レ因諸如_レ是等謂説_二自在等不平等因論_一者作_三如是計_一。人の受くる所の一切は自在天すなわち創造主によるとする説で、大自在天外道の説であるとされている。

(8) 害為正法論 (himsādhama-vāda)

若於_二彼祠中_一呪術為_レ先害_二諸生命_一若能祀者若所害者若諸助伴如

レは一切皆得_レ生_レ天……於_レ靜競惡劫起時_レ諸婆羅門違_レ越古昔婆羅門法_レ為_レ欲_レ食_レ肉妄起_レ此計。

祭壇に於いて供犠をそなえる為に殺生する事に関係するものが生天することを説くもので、末世において肉食を欲するバラモンの説であるとする。

(9) 有辺無辺論 (amānāntika-vāda)

世間有辺、世間無辺、世間亦有辺亦無辺、世間非有辺非無辺。

世間に関して各々有辺・無辺・有辺無辺・非有辺非無辺の四句分別を説くもので、説者は比定され得ない。

(10) 不死矯乱論 (amaravikṣepa-vāda)

彼諸外道若有_レ人來依_レ最勝生道問_レ善不善、依_レ決定勝道問_レ苦集滅道、便自称言_レ不死乱者、隨_レ於處所依_レ不死淨天不乱詰問、即於_レ彼所問_レ以_レ言矯乱或託_レ余事、方便避_レ之、或但隨_レ問者言辭、而轉。

善不善・苦集滅道などの問題に関しての懷疑論であり、サンジャヤの詭弁論等に比定される。

(11) 無因見論 (ahetuka-vāda)

我及世間皆無因生。

我および世間が因なくして生じると説くもので、アジタ、プーナラ、マツカリなどの論師に比定されている。

(12) 断見論 (uccheda-vāda)

我有_レ色色_レ四大所造之身住持未_レ壞爾時_レ有病_レ有癡_レ有箭若我死後

断壞無_レ有爾時我善断滅……。

私の死後の断滅を説くものであって四大種の実在を認めてゐる。宇井博士は順世外道に比定している。

(13) 空見論 (nāsti-vāda)

無_レ有施与_レ無_レ有愛養_レ無_レ有祠祀_レ広説乃至世間無_レ有真阿羅漢……無_レ有_レ一切諸法体相。

施与・愛養・祠祀、妙行・悪行・果異熟、彼此の世間、父母、化生の有情、真の阿羅漢等の一切諸法の体性はないとする説であり、『沙門果経』に見い出されるアジタの説と同一のものである。

(14) 妄計最勝論 (agāra-vāda)

婆羅門是最勝種類、刹帝利等是下劣種類……梵王休胤。謂闍靜劫諸婆羅門作_レ如是。

バラモンは最勝種・白淨色類ないし梵王の子等としてその優秀性を説くもので、闍靜劫の時のバラモンの説とするが、具体的には比定され得ない。

(15) 妄計清淨論 (suddhi-vāda)

若我解脱心得_レ自在_レ觀得_レ自在……是則名_レ得現法涅槃第一清淨……若有_レ衆生_レ於_レ孫陀利迦河_レ沐浴支体_レ所有諸惡皆悉除滅……復有_レ外道_レ計_レ持_レ拘戒_レ以為_レ清淨……謂說_レ現法涅槃_レ外道及說_レ水等清淨_レ外道作_レ如是計。

我が解脱して心(止)觀が自在となれば涅槃を得るとなす

等の五現法涅槃と、沐浴・持戒による清浄とを説き、前者を説現法涅槃外道（順世外道か）、後者を説水等清浄とする。

(16) 妄計吉祥論 (Kotukamangala-vāda)

若世間日月薄蝕星宿失度所_レ欲_レ爲事皆不_二成就_一。……爲_レ此義故
精勤供_二養日月星等祠_レ火誦_レ呪……謂_レ曆算者作_レ如是計_一。

日月星宿により所欲の事の成就・不成就がある故に、それを祭り供養するとする説で、曆算外道の説とされる。

右のように『瑜伽論』は外教の説として十六をあげるが、それらは六師外道關係（マツカリ、アジタ、サンジヤヤ、ジャイナ、プーラナ）、六派哲學關係（サンキヤ、ヴァーイシュニシカ、ミーマーンサー、文法學派）が中心を占めており、仏教内で知られていたであろう主要な外教を網羅的に取り上げようとした事が推測できる。特に三世実有を説く去来実有論、私の常住を説く計我論、我と世間の常住を説く計常論の常住關係三論に対する論破に多くをあてていることは、最初期の唯識論書としての『瑜伽論』の性格からして注目されることである。ところで『瑜伽論』は撰事分において十六異論とは別に外道の悪見趣として以下の様な六十二見を説いている。

有三六十二諸悪見趣。謂四常見論、四一分常見論、二無因論、四有辺無辺想論、四不死矯乱論、如是十八諸悪見趣是計_二前際_一説_レ我論者。又有二十六有見想論、八無想論、八非有想非無想論、七斷見論、五現法涅槃論、此四十四諸悪見趣是計_二後際_一説_レ我論者。

『瑜伽師地論』有尋有伺等三地の研究（一）（清水）

(後略)

いま一の内容を述べる余裕はないが、これらは長阿含の『梵網經 (Brahmajālasūtra)』の後半に説かれているものであり、先の十六異論と対照してみると計常論・有辺無辺論、不死矯乱論、無因見論、斷見論、妄計清浄論の各論の全て、或いは一部分が六十二見の各項目にほぼあてはまると考えられる。阿含經成立の時期に関する考察をおき、一般的にはその方が古いと考えられるので、十六異論は六十二見をその基礎におき、欠如していた上述の六師外道・六派哲學關係のものを中心的に加えて成立していったと考えられるのではないだろうか。なお、その論拠としてのパーリ文 *Brahmajālasūtra* と梵文『瑜伽論』との比較、及び十六異論中のその他のものとの対応論書との比較等は他の機会に譲りたい。

- 1 『瑜伽論』卷六（大正三〇卷三〇三b~三三三a）・“*The Yogācārabhūmi of Śākyas Asaṅga, Part I*” ed. by V. Bhattacharya, 一一八~一六〇頁。
- 2 宇井伯寿著「瑜伽論研究」二一九~二七八頁。
- 3 神子上恵生稿「瑜伽師地論に於けるサンキヤ説批判」(『龍谷大学仏教文化研究所紀要』五)・同「瑜伽師地論に於ける極微説批判」(『印仏研』十五一)・同「瑜伽師地論における外教説批判」(龍谷大学仏教学会編『仏教文献の研究』所収)等。
- 4 『瑜伽論』卷八十七（大正三〇・七八五c以下）。
- 5 『パーリ“*Brahmajāla sūtra*” (D.N. (1) 28~) 漢訳『仏説長阿含經』卷十四梵動經（大正一卷）・『梵網六十二見經』（大正一卷）がある。

（立正大学法華經文化研究所研究員）